多文化主義とポストモダニズムの90年代におけるフェミニズム表現って？

——Sue Harrison の三部作 *Mother Earth Father Sky* と *My Sister the Moon* と *Brother Wind* の場合——

藤　森　かよこ*

本論の目的は，アメリカ合衆国の Sue Harrison (1950-) による *Mother Earth Father Sky* (1990) と *My Sister the Moon* (1992), *Brother Wind* (1994) から成る大河物語のフェミニズム的意義を明らかにすることにある。[1] 特に多文化主義 (multiculturalism) とポストモダニズムの90年代という文脈の中にあるフェミニズムからこの三部作を批評することにある。最初に，本論の前提となる多文化主義とポストモダニズムの文脈におけるフェミニズムの問題を確認したい。次に物語概要を示した後に，物語分析を通してのフェミニズム的意義の指摘と評価をする。

(1) 90年代フェミニズムの困難

極めておおざっぱに言うならば，1970年代フェミニズムとは，近代個人主義志向のヨーロッパ系白人中産階級中心であった。80年代フェミニズムはその偏向を自覚し，人種と民族と階級を視野に入れたものへと多様化し西洋中心を解体する方向を探っていった。アメリカ合衆国を例にとれば，白人中産階級の女の自己実現やキャリア達成は，家事や育児を，移民やアフリカ系アメリカ人などの国内マイノリティの女たちの低賃金労働に依存できるからこ

＊本学文学部
キーワード：フェミニズム，多文化主義，ポストモダニズム，先住アメリカ人

そであり，地球的規模から見れば先進国の女の近代個人主義的自己実現は，発展途上国の搾取の上に成立していることが認識されたからである。80年代はフェミニズムがフェミニズムもいろいろであること，差異を自覚した時期であった。その差異の中には性的志向の差も含まれた。フェミニズムが自らの異性愛中心から同性愛を射程に入れだしたのも80年代だった。90年代フェミニズムは，70年代と80年代を通じてフェミニストが理論化していったジェンダー概念を駆使しながら，問題を「女」から人間存在のありようへと広げている。ジェンダー理論は，生物学的性（セックス）と文化的性（ジェンダー）の発見から，一般に流通する性の構築性・虚偽性・非本質性を暴露し，さらに生得的なものとして自然化され特権化されたセックスさえ，科学や医学の言説によって自然化された＝捏造されたものであること，つまりジェンダー化されたものであることを指摘してきた。[2]したがって理論的にはすでに性差はない。ジェンダー理論が明らかにしたセクシュアリテイとアイデンテイテイにまつわる社会的・歴史的・文化的拘束と恣意性の発見は，人間存在のありかたの「生まれつき要素」を否定する。この発見はフェミニズムの大きな成果である。たえず変化流動してゆく構成物であるものを，生まれつきの固定的な実体的なものととらえ，権力関係の中で価値体系化してゆくことが差別の要である。フェミニズムは，性差別以外のあらゆる差別・抑圧構造の分析や，その起源の追求へと，課題を広げ深めつつある。とりあえず，現在のフェミニズムはここまで来ている。

また70年代から90年代のフェミニズムの関心の移動を，モダニズムからポストモダニズムへの移行から説明することもできる。水田珠枝の研究が示すように，「各人は外的権威に拘束されることのない自立した存在であり，こうした個人を主体にあたらしい社会は形成されるべきだという理念」から成るヨーロッパ近代の人間解放思想の「人間」に女は含められていなかったが，女はこの思想に刺激され女性解放の思想を作り上げてきた。[3]60年代末期から70年代を圧巻したフェミニズムは，歩みは遅くとも18世紀から西洋に蓄積されてきた女性解放思想の（やっと来た）大衆化現象ともいえる。その思想は

ヨーロッパ近代個人主義を基礎とするのだから当然，近代人として先に生まれた「男」と同じ権利と機会と待遇を要求する点で「男なみになりたい」思想であった。主体性を持つ個人の充実と自己実現が目的となる点で，一種のエリート主義，ブルジョワ志向でもあった。確かに白人中産階級中心という70年代フェミニズムへの批判は的確ではある。[4]しかし，西洋近代の人間解放思想・人権思想以外からは，フェミニズムという思想は生まれ得なかった。アジアやアフリカに生まれた女性解放運動は，西洋列強の帝国主義のもと植民地化の過程，もしくは西洋文明の摂取によって生まれ育てられたものである。現代アジア人（合衆国ならアジア系アメリカ人）やアフリカ人（もしくはアフリカ系アメリカ人）が西洋中心主義を批判する心的態度の基礎にある思想こそ，固有の独自の文化の主張・異質の共存（multiculturalism）こそ，加えて植民地化されない国民国家の主張（post colonialism）こそ西洋近代の派生物である。したがって，80年代の差異化されたフェミニズム，多様なフェミニズムを生んだのも，70年代の西洋白人中産階級中心フェミニズムの起源と同じなのである。90年代フェミニズムにおけるジェンダー（文化）とセックス（自然）の二項対立の脱構築の発想も西洋近代の「自然物ではない形成されるものとしての社会」理念の徹底されたものである。西洋近代思想・モダニズムは，自らを解体してきたわけである。「われわれが深くも考えず『自然なもの』として経験化しているさまざまな現存物（その中には資本主義，父権制度，リベラル・ヒューマニズムなども入るだろう）はじつは『文化的なもの』であり，われわれに与えられたものではなく，われわれが作ったものなのである」という認識の徹底がポストモダニズムならば，モダニズムは起源からポストモダニズムを内包していたわけである。[5]

問題は，あるべき社会は作られるものであるとしても，理想の社会を形成するために現存の社会を壊して作り直すわけにはいかないということにある。「女」は作られるものであることはわかったが，現行の性差別文化に全く汚染されない女を作ることはできない。脱歴史的な女であることは不可能だ。わたしたちは，文化の外部に立つことなどできない。しかしあるべき社会は，

文化は，性関係は模索しなければならない。90年代フェミニズムの困難もここにある。問題の指摘と分析と告発にエネルギーを注げた70年代や80年代と比較して，90年代フェミニズムの光景が熱っぽさや歯切れの良さに欠けたものであるのは当然である。特権的外部を，汚染されない主体を無意識に想定していたフェミニストたちが現実の問題に直面している。自らの構築性をいかに自覚し，いかに脱構築し，いかに未来を作っていくか，それも現行の文化の内部で。

以上のような90年代の文脈を理解し，フェミニズムに貢献するような文学表現を発見することが仕事であるフェミニズム文学批評から見て，表題に掲げた Sue Harrison の三部作は興味深い内容と構成を持っている。

(2) 物語概要

第一部 *Mother Earth Father Sky* は紀元前7056年に始まる。場所はベーリング海の島々。極北に近い北アメリカ大陸とつながるアリューシャン列島。人間たちは食料を狩猟・漁労・採集に依存する自給自足体制の部族社会を形成している。極北の地なので，狩猟対象は鳥や小動物以外に鯨やアザラシやセイウチやオットセイなどの海獣である。衣類はそれらの皮を，燃料はそれら北海の動物の油を，道具類はそれらの骨という具合に獲物は徹底的に利用活用する。狩猟や採集は自然条件に依存するので，こうした原始狩猟・漁労・採集社会は恒常的に食料不足の危険を持つ。主たる食料生産者である狩猟者になりうる男が決定権を持つ原始家父長制部族社会である。女の機能は，部族に食料をもたらすハンターになりうる男を再生産すること。女は他の家族や部族との交通（婚姻や物々交換・交易）における交換財でもある。主人公はこうした社会に生きる First Men tribe の13歳の少女 Chagak（アリュート語で黒曜石の意味）で，すでに婚約者の Seal Stalker がいる。彼が Chagak の父に婚資（娘の父が娘と引き換えに娘の求婚者に要求する物）を渡し終わる日に，二人は結婚できる。しかし，今は大家族の長女である

Chagak は母の手伝いで忙しい。

平和な村に好戦的な部族 Short Men tribe（短身族）が襲いかかり Chagak の村は彼女と彼女のまだ赤ん坊の弟以外全滅する。Chagak は母の実家である Whale Hunters tribe （鯨狩り族）の島へ行くことにする。祖父の Many Whales を頼ることにして弟を連れ海へ小舟を出す。途中で Shuganan という名の老人が一人で住む浜に流れ着くが弟は死ぬ。Chagak は老人とともに住み始める。老人との平和な生活が Chagak の村を全滅させた短身族のひとり，乱暴で残酷な Man-who-kills の出現で終わる。彼は Chagak を妻にしたがるが，老人は婚資を要求し時間を稼ぎ，何とか Chagak を逃がそうとするが失敗する。彼女も老人も Man-who-kills の暴力から逃れられない。とうとう Chagak は男から強姦される。老人と Chagak は協力して男を殺害する。しかしその後彼女は自分が妊娠していることを知る。老人に助けられ彼女は息子を生む。名前を Samiq とする。Chagak と Samiq と Shuganan が住む浜に，Kayugh が安住できる場を求めて仲間を連れて海を渡りやってくる。Kayugh は苛酷な旅の途中で妻を亡くし生まれたばかりの息子 Amgigh は瀕死の状態である。Chagak はその赤ん坊にも乳を与え育てる。

短身族の襲来が予想されて Kayugh たちの一行と Chagak の家族（老人 Shuganan は彼女の祖父であり，彼女は彼の孫の妻であり Samiq が短身族の男を父に持つことは秘密とされた）は鯨狩り族の村のある島へ航海する。短身族は鯨狩り族の全滅も計画しているからである。鯨狩り族と協力し，短身族を討ち果たし Chagak は肉親や故郷の人々の敵うちができたが，Shuganan は戦いで傷つき死ぬ。彼女の祖父で鯨狩り族の長の息子も死ぬ。後継者を亡くした祖父は Chagak の息子に執着するが息子が成人したら鯨狩り族の村によこすことを約束して Chagak 親子と Kayugh の一行はもとの浜へ帰還する。その後 Chagak は Kayugh の良き妻となる。

第二部 *My Sister the Moon* は紀元前7039年に始まる。第1部から約17年後である。Kayugh の先妻の残した娘と息子 Amgigh も成長した。Chagak

は彼らの良き母である。短身族の男に強姦されてできた息子 Samiq も成人した。この二人の青年は兄弟として育つ。Kayugh は Chagak の息子も実の息子同様に可愛がる良き父であり良き夫である。物語の中心的ヒロインは Kayugh の仲間 Gray Bird と Blue Shell の娘へと移る。この娘は初潮を迎えるまで名前がなかった。名前がないことは魂がないと考える習慣がある文化と時代である。子どもに名を与えるのは父の役目だが，父の Gray Bird は娘が生まれたとき，娘を殺すことを要求した。この父親は生来小心で勇気はないがどん欲で，家族を養えるだけの狩猟能力はなく，娘を養う気はなかったからだ。村のリーダー Kayugh が見かねて，将来息子の Amgigh の妻にするからと申し出て娘は命を救われる。しかし父親は，腹いせに娘に名をつけず虐待し常に娘に暴力をふるう。しかし交易商人との交換には娘を使い利用する。娘の後に生まれた息子 Qakan は父に似て怠惰で愚劣な粗暴だが，父親は息子を甘やかす。

やっと娘も成人し Kayugh の取りなしもあり名前を与えられる。父はまた腹いせに「誰？」という意味の奇妙な Kiin という名を娘に与える。昔の約束どおり Kiin は Amgigh の妻となり父の虐待から解放される。実は子どもの頃より彼女が愛しているのは夫の乳兄弟 Samiq であった。妻を兄弟で共有するのも珍しくない当時の習慣から彼女は Samiq とも結ばれる。しかし彼は母の祖父の鯨狩り族の島に鯨狩りの技術を学ぶために村を去る。Kiin は妊娠し平和に暮らすが，弟の Qakan は狩りが嫌いで交易で身を立てたい。交換財として姉を思いつき，彼女を誘拐し強姦しセイウチ族の長である残酷で強靱な Raven の二番目の妻として売り飛ばす。Kiin は双子の息子を生むが，片方の Shuku は Amgigh にそっくりで片方の Takha は Samiq にそっくりであった。

Kiin の愚劣な弟 Qakan は，またも Kiin を交易の道具にしようと双子の息子もろとも誘拐する。彼女の夫 Raven は義理の息子二人と彫り物の才能に恵まれた Kiin を取り返しに彼らの居場所をつきとめて Qaken を殺す。そのすきに Kiin は赤ん坊の息子二人をかかえて逃げ自力で生活をする。支

えもなく暮らす Kiin の浜にある日偶然，故郷の人々がたどり着く。火山の爆発に追われ，あらたに定住する場所を探してやってきたのである。その一行のリーダーは Samiq だった。彼も鯨狩り族の村で火山の爆発による地震にあい祖母から無理に結婚させられた鯨狩り族の女 Three Fish と孤児の少年 Small Knife を連れて故郷に戻ったのだが，他に定住する場を探すことを父に進言し，父の後を継いで村の長となった。父は実の息子の Amgigh より彼を長にふさわしいと認めた。平和が戻るかに見えたが，セイウチ族の村から交易に Raven が Kiin たちの住む浜にやってきて,妻や義理の息子の生存に気づく。Kiin と息子たちをセイウチ族の村に連れ戻そうとする Raven と Kiin の夫 Amgigh は闘う。Amgigh は負けて殺される。兄弟をかばおうとした Samiq もハンターとしては命取りの負傷を右腕に負う。Kiin は息子の一人 Takha を Three Fish に託す。Raven には Takha は死んだと嘘をつき，Shuku とともにセイウチ族の村に連れ戻される。

第三部 *Brother Wind* は紀元前7038年に始まる。Kiin と Shuku を奪われ兄弟の Amgigh を殺され，怪我をした Samiq は不具となった右腕の訓練をしている。村の長として心を砕く日々を送りながら，いつか Kiin たちを取り返すことを誓う。一方，セイウチ族の村の Kiin は，Raven の交易の旅の留守中に第一妻 Lemming Tail に家を追われる。それをいいきっかけにして，故郷の人々が住む浜に逃げようと考える。赤ん坊の Shuku を連れての長い旅が始まるが食料の確保もままならない。海ガラスの卵を採ろうと鳥から攻撃され崖から落ちそうになり怪我をする。彼女を助けた Ugyuun 族のもとで休養し，近いうちに故郷の人々の浜に旅立つという日にセイウチ族の長 Raven とその妻の Lemming Tail が Ugyuun 族の浜にやってくる。 Raven は豊かに繁栄した River Side 族の長の霊力をさずかるかわりに，そこの長に霊力ある彫り物を作れる Kiin と義理の息子の Shuku をさしだすことにしたのだ。が，村に戻ってみると Kiin と Shuku がいない。急遽 Lemming Tail を Kiin であるとでっちあげ，彼女が密通してできた息子を Shuku であると偽って River Side 族の村にとって返す途中で，も

うひとり男の赤ん坊を買いに Kiin の休養する村に来たのである。Raven は River Side 族の長に Kiin には双子の息子がいると嘘をついていたからである。何とか，赤ん坊を買ったのだが Lemming Tail は病気らしきその赤ん坊が気に入らず，ある家の戸口に置かれていた赤ん坊と買った赤ん坊を取り替える。その奪われた子どもは偶然 Shuku だった。錯乱する Kiin。ともかくも Kiin は故郷の人々が住む浜へもどることにする。

やっと Kiin は Samiq たちに再会する。事情を聞いた Kiin の母 Blue Shell は，奴隷に身をやつしてセイウチ族の村に入り Shuku を取り返しに村を去る。母は，少女時代の Kiin を夫 Gray Bird の虐待から守れず，かばうことをしなかったことで娘に負い目を感じていたからだ。卑劣な夫は仲間の乏しい蓄えを盗んだことで村から追放されていて，母は Big Teeth と再婚していた。しかしセイウチ族の村に Shuku はいない。River Side 族の村にいることを突き止めた母は，Raven に狼と間違えられ殺される。Samiq と Kayugh は River Side 族の村まで航海し Shuku を取り返し帰還する。

Kiin や Samiq の村に Raven が襲いかかる。村を追われた Gray Bird は名を Waxtal と変えて Samiq たちへの復讐に鯨狩り族の人々をそそのかし，彼らとともに村を襲う。昔より格段に強くなった Samiq は Raven たちに打ち勝つ。孤児で Samiq の養子となっていた Small Knife はその戦いで殺されてしまう。しかしとうとう Kiin たちに平和がおとずれる。Kiin は Samiq の二番目の妻となり Three Fish とも仲良く暮らす。逃げおおせたつもりの Waxtal は溺死する。やっと家族や仲間がそろった，ある晩のだんらんに，Kiin は Samiq の母であり義母の Chagak に昔話をせがむ。かつて13歳の孤児だった Chagak も33歳となり今では堂々とした祖母である。彼女は追憶しながら彼女の物語をとうとうと語り始める。それは第一部の語りの冒頭の反復である。こうして物語は円環を成して終わる。

(3) 多文化主義における物語の意義

女性を主人公にして彼女をして数々の困難に立ち向かわせ最後に幸福をつかまえさせるというのは，物語の常套のひとつである。この観点からすれば，上記に長々と紹介した物語にとりたてて新しい意味も意義もないかに見える。しかし，90年代文脈の中に置いたとき，この物語の意義は大きい。言い換えれば，90年代的文脈を形成する時代条件があるからこそこの物語の文学的価値及び商品価値が増幅される。またそうした時代条件がなければ，創造され得なかった作品である。

60年代の公民権運動の高まりにはるかに先だって，アフリカ系アメリカ人を代表にマイノリテイの立場を記録する歴史書・思想書やフィクションは書かれていた。先住アメリカ人も例外ではない。が，一種の民族学的・文化人類学的あつかいではなく，政治的メッセージもこめた先住アメリカ人の文学が文学市場に登場するのは70年代にはいってからである。日本でも1970年に出版された Dee Brown の *Bury My Heart at Wounded Knee: An Indian History of the America* が知られてきた。[6] これらの抵抗の記録は，今は国家から「施された」保留地に生活保護を受けて住む人々に祖先の歴史に誇りを感じさせ自尊心を回復させると同時に，他のマイノリテイをも勇気づけ，多数派に属する人々には彼女ら，彼らへの理解と敬意を教える。最近では Forrest Carter の *The Education of Little Tree* (1976) や Jack M. Weatherford の *Indian Givers* (1988) など先住アメリカ人への関心はますます高くなってきている。[7] その関心の中に「文明に疲れた人間が，自然とともに生きる人々とその生活様式に癒しを求める」といった屈折した帝国主義的植民者的心性を見て批判することはた易い。しかし現在の読者は，そうした「エコロジーおたく」の心性だけに酔っているわけにはいかない。80年代後半から目だった大学の人文学系のカリキュラム改革から端を発する多文化主義運動とマイノリテイに対する差別表現を廃する言語改良運動である

PC (political correctness) が Indian とよばれてきた人々の歴史と闘争をより可視化した。彼らや彼女たちは本来の歴史背景を示す Native American という呼称をやっと獲得した。

本論で問題にされている大河物語も上記のような文脈における先住アメリカ人の歴史や文化への関心・敬意の蓄積の歴史の成果である。極北で暮らす人々の文化と歴史と風俗と慣習と生活様式・感情様式を先史にさかのぼって物語の形式でリアルに描写するには，背後に先住アメリカ人の文化に対する膨大な学識と調査が必要である。志や想像力だけでは書けない。実際に作家の Harrison はアリュート語など6つの先住アメリカ人の言語や考古学，人類学，地理学を学んで9年かけてこの処女作を完成させたという。またこの作品はかなりの数の出版社から出版を断られ，その際大学出版局にあたったらどうかと助言されたという。それほど学術的な専門知識をベースとした作品なのである。[8)]

特に，先史時代を設定したことはきわめて戦略として成功している。現代の問題を扱うのに，その問題を未来や過去の設定の中に置くことは，現代というあまりにも生々しい直視しがたい事柄に読者を近づける技法である。もちろん，現代的問題がそのままに，過去や未来の文脈の中に移しかえられるわけはない。しかし時間的空間的な想像上の距離が置かれることによって，その問題の本質がより鮮明に浮かび上がることは確かにある。Harrison の物語も，その魅力のために容易に気づかれないが，そこに描かれる世界はかなり暴力的である。血なまぐさい。ある部族は他の部族を殺し，女にも子どもにも老人にも容赦しない。男たちは海の動物を追い狩り殺し，女たちはそれらを解体し内蔵も皮も血液もすべてを利用する。骨も煮出せば油が採れる。さらに残った骨も食べられる。生きるものは，他の生きものを殺し生きねばならない。先史時代の狩猟体制の中では，食料の生産性は低いので，共同体の成員が生き残るために，食料不足の年には老人たちは餓死を選ぶのが暗黙の習慣である。食料は共同体の成員にその獲得の成果に応じて配分されるので，ごくむきだしに強い者，狩りに有能な者，食料の調達に優れた者の発言

力は大きい。弱い者は，それだけで軽蔑される。生きるために，すべての生きものが懸命で必死である。善意や事の是非を越えて，生きることの実相は弱肉強食・適者生存の原則に厳しく貫かれている。

先史時代ばかりではなく，現代でも生きることは他の命を食らうことにはかわりがない。文明とは，闘争を避け食らいあわずに生きものどうしが共存するためのシステムであり，そのシステム構築・整備・維持が人間の歴史の発展である。多文化主義も，支配的な文化が他の文化を食らうことを避ける異質の共存がテーマなのだが，やっとそれが社会的現象としての広がりと深まりを持って，論議されるようになった。かつては多数の文化の共存ではなく，多数の文化に超越的な基準を設定して，その基準を満たせばその文化は承認されるという「多数の中の統一」，つまり文化多元主義（cultural pluralism）が提唱されていた。しかしその従うべき超越的基準の西洋近代の価値観への圧倒的傾きが認識されるようになり，かわって提唱されるようになった概念が多文化主義である。[9]しかし近い将来でも，まだその実現はない。この意味でも，人類はまだ文明を達成していない。その物質的条件は，まだ整っていない。この物語が提示する原始の荒々しい相の中に，WASP 支配のアメリカ合衆国が第三世界を食らう状況を，白人と先住アメリカ人の関係に似た闘争を，より広範囲に現代世界をおおう人種間闘争を，階級闘争を，国民国家闘争を，性的闘争を見る読者は多いだろう。先史時代の海洋民族の叙事詩が，現代のいまだ達成されざる文明の陰画となる。

(4) 90年代フェミニズム表現の戦略

多文化主義の文脈から見たこの物語の意義の確認の後は，90年代フェミニズムから見た意義を整理したい。作家の Harrison は1950年生まれである。アメリカのフェミニズム運動の洗礼を，もろに受けざるをえなかった世代である。確かにこの物語は，70年や80年代のフェミニズムを通過しなくては書かれなかった作品である。その理由もかねて論じてゆきたい。

先史時代を設定したことは，読者対策として，きわめて有効で戦略的でさえある。この設定はフェミニズムから見ても，反フェミニズムから見ても，またフェミニズム内部の対立から見ても，抵抗が少ない。どの立場からでも容易に受容されうる便利な設定である。伝統的な読者にとって抵抗がないことは言うまでもないだろう。女性が数々の困難をくぐり抜けて最後に幸福をつかまえるというのは，物語の常套であることは(3)の冒頭ですでに述べられた。

では，フェミニストから見たらどうか。この物語はフェミニズム批評からきわめて安全である。先史時代ではフェミニズム批評の常套の斬り方が通用しない。たとえば，第一に先史フィクションが対象では自然＝女／文化＝男という性の二分化の構図を問題点として指摘できない。紀元前7000年では，自然の力は圧倒的であり，文化との拮抗した二項対立は成立しない。近代の文脈から見れば万物にやどる霊と交流するシャーマニズムは，その非科学性と不合理性から女の分野であるが，Harrison の物語においては，シャーマンは主に男である。霊力のある男が集団の長でもあるような政治と宗教が未分化なシステムにおいて，混沌とした自然を少しでも手なづけられる霊媒術は，きわめて高度な知識であって文化に属するから。第二に，先史フィクションは登場人物たちのあからさまなジェンダー化を正当化する。狩猟・漁労・採集社会において，食糧確保能力が集団の序列を決定する。生き抜くための仕事の種類と分担は肉体に応じて決められる。個体差は多少あろうと，一般的な男女の体力差は決定的である。弱肉強食が支配原則である原始社会では，セックスとジェンダーのズレは限りなく小さい。

また，先史フィクションはフェミニズム内部の差異から見ても便利である。フェミニズムには，女とは歴史的に作られるものと考える社会構成主義と生来の女特有のものがあると考える本質主義の対立がある。この対立も歴史性を論じるほどの蓄積がない原始時代という設定の前に無効になる。この対立は，現代の文脈の中に置けば，アメリカに代表される先進国型近代個人主義フェミニズムと，途上国型共同体・母性フェミニズムとなる。この対立は一

つの国の内部にもある。白人中産階級中心フェミニズムが個人の自己実現をめざすなら，アフリカ系やアジア系アメリカ人女性は家族とか民族の維持と再生産に貢献する女＝母の力を重視する。日本フェミニズム内部にもこの対立はある。共同体・母性フェミニズムは，男の共感を獲得しやすく伝統的に日本においては根強い。[10] こうした対立も先史フィクションにおいては無効である。個人が個人を生きられる物質的条件が整ってきたのは，現代においてもほんの一部の国々だけである。

日本フェミニズムにおいて，かつてエコロジカル・フェミニズムが提唱されたことがあった。産業社会に組み込まれて環境汚染や人間疎外を推進する男たちではなく，女たちこそ自然との共生や人間性回復を考え実践する可能性があるという思想である。江原由美子が指摘したように，この思想は結局は，自然＝女／文化＝男という性の二分化の反復でしかない。また女だけが産業社会の外部にたてるわけがない。[11] 先史フィクションならば，こうしたエコロジカル・フェミニストのパストラルへの憧憬を心地よく満たすだろうか。

ともかく，この物語は，フェミニズムの時代を通過した作家の書いた，意図的にフェニミズム批評回避の設定をなされた伝統的物語に見える。しかし，注意深い読者ならば，この作品に遍在する伝統的物語からの親フェミニズム的逸脱に気づく。もっとも顕著なのは，家父長制の形骸化の提示の遍在である。伝統的物語におけるヒロインは苦難の末，家父長制に組み込まれ安住の場を得る。家父長制はヒロインの幸福の安全保障となる。そうした枠組をHarrison の物語も踏襲している。しかしこの物語には家父長制を内部から空洞化する装置がやたら散りばめられている。

第一部 *Mother Earth Father Sky* の Chagak は父を殺され，未来の夫を殺される（家父長制からの分離）。生き残った赤ん坊の弟を大義名分にして祖父の島へ行こうとするが，その弟に死なれる（もう一つの家父長制への入会権喪失）。短身族の Man-who-kills の妻とさせられて，彼を殺害するが，その後，妊娠がわかり男の子を出産する（家父長殺し）。孤独な老人 Shuganan

の孫の妻として Chagak は自分を説明し，短身族の男のことは秘密とする（でっちあげられた家父長制家族)。彼女は祖父の鯨狩り族に短身族の危機を知らせる。これら二つの部族は戦い祖父は息子を戦いで失う（ひとつの家父長制の終焉)。

第二部 My Sister The Moon において，Chagak は Kayugh の妻であり，先妻の遺した娘や息子と実の息子を育てる母である。夫の嫡子である Amgigh より短身族の息子の Samiq の方が夫の後継者にふさわしい器量という設定である。彼女が殺した卑劣な短身族の血を引く Samiq の方がよほど立派な長男らしいという設定は，運命の皮肉というレヴェルで考えてもいいが，家父長制の正統性の揺らぎととらえてもいい。同じような指摘は，ほかにもできる。第二部のヒロイン Kiin は Amgigh の妻となり妊娠し双子の男児を出産するが，片方の息子は Amgigh そっくりで，片方は Samiq そっくりである。この奇妙な事実の説明として，物語は，兄弟の妻は兄弟の共有物であり兄弟間で互いの妻の交換が可能であった当時の風習にしたがって，Kiin が Amgigh と同じく Samiq とも同衾したので兄弟それぞれの息子を生んだと語る。もちろんこれは，医学的にはありえない。この兄弟間には血縁関係もないので，双子の息子が叔父に似るということもありえない。このエピソードも，Kiin の息子たちの父親が兄弟のどちらかに特定できないという点において，家父長制の正統性の揺らぎと考えられないだろうか。Kiin は兄弟という男たちの交換財にされることによって，彼女を支配する家父長制の内部からその正統性を崩す役割をしている。

家父長制の空洞化は，家父長殺しや家父長のでっちあげや，家父長制家族の崩壊や家父長制の正統性崩し以外にも，矮小化・卑小化された家父長たちを，やたら登場させる点にもうかがわれる。代表的なのが Kiin の父と弟である。Kiin の父親は狩り能力の不足でいつも足りない生活財（共同体は所帯ごとに獲物を分配するが，獲物獲得に力を尽くした順と配分量は比例する）の獲得のために，娘を交易の交換にするしかない。言い換えれば娘に依存しているのに，娘を憎み虐待する。物語の最後でこの卑劣な男は，その卑劣さ

にふさわしい死を迎える。Kiin の弟 Qakan は父親以上に狩り能力がなく交易で身を立てるために，結婚している姉を交換物にする。姉を誘拐し，強姦し，Raven に売り飛ばす。それでもなおかつ姉に依存しまた姉を誘拐し交換財として利用しようとする。Raven に殺され霊となってもメソメソ泣きながら姉を頼る。家父長制の本質とは男が最後まで頼り搾取する資源としての女の確保への執着であろうかと読者に感じさせるほど，この二人は愚劣で醜悪な造形がされている。そのようなものとしての家父長制，女によって成立する家父長制の維持のために女に執着・依存せざるをない男たちは彼らだけではない。Kiin を Qakan から買い彼女の夫となり，Amgigh を殺した乱暴・強靱な Raven は，彼女の双子の息子が欲しいから，Kiin の彫り物の霊力が必要であり，かつその彫り物を交易で高く売りたいからこそ彼女を買い，Amgigh を殺し Samiq の右腕を不具にする。第三部でこの Raven は River Side 族の長の霊力の秘密を得て，名目ともにセイウチ族の長となるために，交換に Kiin を差しだそうと悪戦苦闘するはめになる。男の権力欲が Kiin と双子の息子をめぐって空回りする。第一妻の Lemming Tail の生んだ息子が自分の息子ではないことはわかっているがそれを責めたりはしない。何にせよ息子は財産であり，父が誰であるかなど Raven にはどうでもいい。不貞の妻も交換財になる。家父長制の要とは，男のサバイバルと他の男への支配を有効にするための資源としての女の管理であることが，実質的で現実的な Raven の造形からより一層明瞭に見てとれる。

上記のような家父長制脱神秘化のエピソードが物語において遍在するだけでは，この物語のフェミニズム志向の十分な証明にはならないのかもしれない。男の資源としての女の状況の指摘とその資源をめぐる男たちの空騒ぎの提示だけでは，単なる歴史的事実のフィクションにおける再現でしかないのかもしれない。結果的に事実の描写が家父長制幻想をあらわにしたことになっただけであり，作家の意図はなかったのかもしれない。ならば，物語のヒロインたちのサバイバルの様相を見てみよう。彼女たちの生き抜くことへの積極的な意志的な姿勢は，伝統的女性受難・虐待物語の枠組みにはおさまらな

い。時に自分たちを支配する家父長制システムを逆手に取ったりもする。おとぎ話のヒロインのようにただ待っていたら救済者が現れるわけではない。彼女たちは自らの安全と幸福を獲得するために，果敢に独力で旅にも出るし戦いもする。そのたくましさ・骨太さは，原始の女たちとはいえ現代のフェミニズムになじんだ読者にさえ新鮮に感じられる。

たとえば第一部のヒロインはどうか。Chagak は肉親や同族の人々が殺されたあと，ただ悲しむだけでなく男のシャーマンしか許されない死体の埋葬を自力で完了する。村人たちの霊が迷わないように，きちんと埋葬することが生き残った自分の義務だと考える共同体への責任感を彼女は持っている。共同体に一体感を持ち依存することは通常でも，責任感を持ち自らが主体的に感じた義務を遂行するという人物造形は女の伝統的ありようから逸脱している。自殺しきれない自分の生きることへの欲望を自覚した後は，弟を祖父の村に連れてゆけば自分の居場所が祖父の村において確保されると考え実行に移す。父の息子である弟を育てることを大義名分にして自らの位置を測り，家父長制の中の女の役割を逆手に取りサバイバルに利用する現実性を彼女は持っている。したがって，Shuganan の浜で自活するべく通常は男しかしない狩りの技術を習得しようと努力もする。また，短身族の Man-who-kills に易々と妻にさせられたわけではなくて，精いっぱいの抵抗と逃亡を試みている。物語はこの試みを丹念に語る。読者はこれほどの手に汗握る試みだから，その逃亡は成功すると待ち望み信じるが，物語は読者の希望的読みや期待を裏切る。伝統的物語の常套の甘さとご都合主義をひっくり返す。13歳のヒロインは最も呪うべき男から処女膜をナイフで切開されて強姦される。後の彼女の Man-who-kills 殺しの正当性と妥当性を保証し，読者に共感させるのは，彼女の逃亡の試みの長い過程とその失敗と無惨な結果の描写である。しかしこの強姦が彼女の内面に暗い陰を落とし彼女がトラウマに深く悩むといった近代心理小説的展開はこの物語においてはない。Chagak の気丈さ，不可抗力の事故に必要以上にとらわれない原始時代の女の健康な即物性は，近代以降顕著になった女への性的規則・呪縛を逆説的に照射する。強

姦は彼女を傷つけたが，彼女の人となりの中身に影響を与えるような重さを持ってはいない。彼女の変わらなさは，処女性が若い女の価値を高めるという思想や，性体験が女の人格の質を決定するという思想の無根拠・歴史性を読者に伝えはしないか。つまり女はそんなやわじゃない。そんなことで変わるほどひ弱じゃない。だからこそ，自分を傷つけた男を殺すこともためらわず実行する。後には Kayugh たちとともに祖父の村に旅して短身族の攻撃を知らせにいく。鯨狩り族と短身族の戦いにおいて，彼女も短身族を一人殺す。彼女の息子の父親をかぎつけた Gray Bird につきまとわれたとき，飛び出してきた短身族の男を殺したのは，戦士であるべき男の Gray Bird が逃げたので身を守るためであった。Chagak は，Gray Bird の卑怯・臆病を口外しない代わりに，息子の秘密を口外しないよう彼に約束させる。取り引き成立。男の面子というきわめて家父長的な物と引き替えに彼女は自らの安全を守る。彼女は犠牲者になど絶対ならない。

第二部のヒロイン Kiin の造形はよりフェミニズム度を増している。父にうとまれ名前さえ与えられず，父のきまぐれで殴られ怯えるだけであった彼女が，名前がついていないことは魂がないことでもあり，だから年頃になっても初潮がなく，一人前の女になれないだろうと言われた彼女が，父に初めて逆らったその直後に初潮を迎える。父に反抗する勇気を彼女に与えたのは隠し持っていた鯨の歯だと Kiin は思う。Kiin はその歯で彫り物をしたい。自分がしたいことのために，初めて主体的に秘密を持ったことは，彼女の内部に彼女自身の核を，誰も犯せない核を形成した。その心の核を拠り所にして，自分に魂＝名を与えなかった父を初めて否定したとき，やっと彼女は大人の女の印を手にする。家父長制の内部にいる女が，男にとっての単なる資源である女が，自らの内面を自覚することで，それを守ることで，家父長に抵抗する。そのことによって，自分自身を獲得する。このエピソードにフェミニズム的意義を見ていい。家父長制は女にも内面化されているシステムだ。女はその外部に完全に立つことはできない。しかし女の内部を浸食しきることのできないシステムの裂け目もある。女の支配に依存するシステムは女が

拒否すれば成立しない。システム全体の完全な転覆は不可能でも，局地的な抵抗は可能だ。Kiin の内面の不可侵性が彫り物という，原料との対話と内面との対話から形成される仕事を可能にさせる。それがあるからこそ，彼女は弟や Raven から逃げて幼い息子たちをかかえて，採集や魚を採って自活する。Amgigh が殺され Samiq がケガを負ったとき，彼を救うために Raven とともにセイウチ族の村に帰ることを選ぶ。誰にも犯されない内面とその内面を反映させる仕事＝彫り物があれば，故郷にもどるチャンスを待つことができる。Raven が交易の旅に出かけ，Lemming Tail とその兄弟に追い出されたことをよいきっかけに彼女は故郷へ帰ることにする。Samiq と残してきた息子の Takha のもとに帰るため辛い長旅を敢行する。Kiin は Chagak と同じくやはり犠牲者に甘んじない。

この物語が明らかにフェミニズム的意図によって描かれていることは，第三部において，Kukutux という女を脇筋の話のヒロインとしておいていることでもわかる。この物語全体は Chagak と Kiin を中心にして展開されるが，彼女たちの生きる力は子どもを守るためであったり，夫を守るためであったり，家父長制家族の枠からはずれることはない。彼女たちがどれだけ伝統的女性像を逸脱した造形をされていようが，母であり妻であり娘である枠組みの中にいる。彼女たちが苦難の末に獲得するのは，家父長制家族の温もりである。しかし Kukutux は夫も子も無くした孤独な女である。家父長制家族の庇護のない彼女は，自分が捕まえた魚の正当な権利さえ同じ村の有力者の妻に理不尽に奪われる。狩りをして生活財をもたらす夫も息子も父も兄もいない女は共同体の寄生虫として軽んじられる。あげくのはてには，村の有力者の取引の交換財として利用されそうになったり，望まぬ男を夫として押しつけられそうになる。そのとき，彼女は家父長制を逆手にとって抵抗する。彼女に命令する権利のあるのは父か兄か夫か成人した息子である。しかし誰もいない彼女には誰も命令できない。村の有力者でもそんな権利はない。家父長制家族の庇護のない彼女は，皮肉にも家父長支配から自由である。物語の終わりにおいて彼女は，自ら選んだ男に再会し彼の妻になる予感

を心地よく思う。その男が自分を妻にするのに婚資は必要ない。Kukutux は家父長の交換財になる必要がないから。作者が物語全体の構成から見れば特に必要とも思われないこの Kukutux に頁数を割いたのは，明らかに Chagak と Kiin とは違う立場の，しかしやはり犠牲者に甘んじない意志的な女を提示したかったからではないか。

もう一人 Gray Bird の妻で Kiin の母である Blue Shell の造形にもフェミニズム的意義がある。かつて美しかった彼女も無能で横暴きわまりない夫との生活にやつれ疲れ老け込むばかりであった。その生活は彼女の勇気や愛情も押しつぶした。娘を少しでもかばうことを彼女はしなかった。夫が仲間たちの所有物を盗み彫り物の材料と交換したために，共同体全体の越冬が脅かされ，夫は追放されることになる。夫は最後に残った財産ともいうべき妻を伴って村を出ることを主張するが，彼女は初めて夫に抵抗し断固拒否する。Big Teeth の第二妻となってやっと彼女は平穏を得る。自らの尊厳も取り戻す。彼女はかつて娘の Kiin を守れなかった事を悔い恥じて第三部において奴隷に身をやつしてセイウチ族の村に Shuku を探しに旅立つ。かつては家父長に加担して娘を犠牲にした女が，自ら申し出て孫を探しに遠い地に旅立つ。そこで殺されることになるが，最後に孫の行方を夫に言い残し娘を救う。この母も娘と同じく犠牲者に甘んじることを拒否し意志的に選択する。この母と娘は，この母の夫や息子，この娘の父や弟の矮小さとは対照的な高みを達成している。家父長制家族において母は父の共犯となり娘を家父長制維持のために利用する父の共犯者である。また娘は真の抑圧者を直視せず直接的な（疑似）支配者として母を疎むのが通例である。[12] Blue Shell と Kiin は夫や父や息子や兄弟の介在・干渉・分断を越えて対峙することになる。システムの中で，構造の中で，真に出会うことが阻まれている二人の肉親の女がやっと出会う。母と娘や，嫁と姑や，姉と妹は，家父長制家族の枠組みにおいて真に出会うことが少ない。家父長制というシステムの中に埋没すると女たちの連帯はない。そんなことを想起させるエピソードである。

この物語のフェミニズム的意義は，家父長制の脱構築的要素の遍在と自ら

に肯定的な，意志的な女たちの提示にあるだけではない。男性の造形にもそれはある。男性の登場人物が，ジェンダーを過度に逸脱して「女々しい」からではない。女に依存して成立する家父長制の維持のためにあくせくとする男たちが登場するからではない。それらは，単なる事実の描写でしかない。注目したいのは，第三部の Samiq である。第二部において彼はきわめて男らしい優秀で勇敢なハンターであり，有能なリーダーである。鯨狩りの技術も習得している。しかし彼は Raven に右腕を斬られてハンターとして無力となる。家長でありながら家族を養えない。食料を得ることができない。弱肉強食の原始社会において，狩りができない男は女と同じである。慢性的食料不足の原始共同体において，狩りができないリーダーはリーダーではない。Samiq は去勢されたわけである。傷ついた男としての誇りと，これからの食糧確保への危惧で彼は悩むがついに次のような気持ちに至る。

> What does it matter if I cannot hunt? What does it matter who I am? I will pick berries with the women if it will help my people. I will walk the beach like an old man and get her sea urchins. It does not matter about me. But do not let my people starve. Do not give them a winter of pain and cold. Protect them from the sickness that comes to body and mind when there is no food.[13]
>
> (狩りができないからどうだというのだ？僕が誰であろうがかまわないではないか？それが仲間たちの役に立つなら，僕は女たちといっしょに木の実を摘んだっていい。老婆みたいに浜を歩いてウニを集めてもいい。そういうことをしたからといって，どうだというんだ。仲間たちを飢えさせてはいけない。仲間たちに痛くて寒い冬を過ごさせてはいけない。食べ物がない時に体と心を襲う病からみんなを守るんだ)

Samiq は悩んだすえに，狩りをするべき男としてのアイデンティティに執着することをやめる。実際に仲間たちが飢えず冬を乗り切ることができれば

いい。その手助けが少しでもできればいい。そのためには女がするのにふさわしいことでもやろうと決める。かれは仲間への愛や責任感を自分の男としての面子やプライドに優先させる。仲間への愛のために自分のジェンダーから自由になる。この物語はこういう男をヒーローにしているのである。こうした男性造形にフェミニズムが影響していることはまちがいない。このヒーローは去勢されて真のリーダーになる契機を得る。「男」ではなくなった時に真のヒーローとなる。

加えて，この物語の題名に注意したい。第一部は『母なる大地父なる空』である。これは書店で見かければ，今時アナクロニズムとしかいいようがないほどジェンダー・バイアスのかかった題名である。フェミニズム意識の高い読者なら，ほとんどギョッとするぐらいだろう。しかしこの題名はある違和感を感じさせる。なぜならば「父なる空母なる大地」と言うのが通常であるからだ。二項対立の上位概念が先頭に置かれるのが通常であるからだ。しかし作者は母＝大地を先に置いた。ここに作者のひねったフェミニズム的視点を感じてもいいのではないか。明瞭にジェンダー化された先住アメリカ人原始社会における原始フェミニストたちの物語の題名を選択する際の，作者のひねったフェミニズム的意図を感じてもいいのではないか。第二部の題名は『姉（妹）なる月』であり，第三部は『兄（弟）なる風』である。これらの選択に，第一部のそれほどの意図もひねりも感じられないが，作者は少なくとも姉と兄の比喩として性の二項対立的な図式を想起させるものは選んでいない。姉の「月」と兄の「風」は，それぞれ並列しようがない別のカテゴリーに属するものである。強いて言えば，月は風よりは超越的なものであり，女の比喩としてそれを選んだことにフェミニズム的意図があるのかもしれない。

以上，Harrison の三部作について，現代における意義を指摘しフェミニズム批評を試みた。一見，伝統的な女性虐待物語，その虐待を耐えた後の幸福獲得物語（もしくはやっぱり可愛そうに死にましたの不幸物語）の枠組の採用・フェミニズム批評から安全な設定の選択・西洋近代中心を脱した設定

の選択をベースにして，フェミニズム・メッセージを繰り出してくる巧妙さを見てきた。伝統的読者の期待と文学慣習に沿いながら，環境に虐待されるはめになる普通の女への感情移入や共感を誘いながら，読者の内面化された家父長制幻想に裂け目を与える装置を物語内のあちこちに仕掛け，男でなくなることによって豊かになる男性像を提示したり，無力で虐待される状態から自らを鍛えていくヒロインたちを丹念に描写する物語の相を見てきた。

くりかえすが，70年代から80年代に展開された「男並みフェミニズム」や，西洋近代個人主義的フェミニズム物語は多文化主義が課題である90年代において，有効ではないことが確認された。男が女装しただけのヒロインでは共感されない。あからさまなフェミニズム・プロパガンダ物語も受け入れられない。プロパガンダが簡単に通用するほど物語受容というものは単純なものではない。また，現行のシステムを批判するのも，そのシステムの中でしかできないし，そのシステムに換る別のシステムはまだ提示されていないという閉塞状況のなかで，なおかつフェミニズム表現を有効に試みるには，どんなやり方がありえるのか。本論はそのひとつのサンプル，モデルの紹介である。

注

（本論は1996年10月27日に愛知県・市邨学園短期大学で開かれた日本児童文学学会第35回研究大会での口頭発表をもとにしたものである。）

1) Sue Harrison, *Mother Earth Father Sky* (New York: Avon, 1990),『母なる大地父なる空』上下（河島弘美訳，晶文社，1995）/ *My Sister the Moon* (Avon, 1992),『姉なる月』上下（行方昭夫訳，晶文社，1996）/ *Brother Wind* (Avon, 1994),『兄なる風』上下（行方，河島訳，晶文社，1997刊予定）
2) Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and Subversion of Identity* (Routledge, 1990) 参照。本書の第１章の翻訳「セックス／ジェンダー／欲望の主体」上下（荻野美穂訳，『思想』846号847号）がある。この問題については井上俊・上野千鶴子その他編『ジェンダーの社会学』岩波講座・現代社会学11（岩波書店，1995）に論議が整理・紹介されている。

3) 水田珠枝『女性解放思想史』(筑摩書房，1994/初版は79年に刊行) 参照。引用文は序章18頁より。

4) Barbara Smith, "Toward a Black Feminist Criticism," *The New Feminist Criticism: Essays on Women, Literature. and Theory,* ed., Elaine Showalter (London: Virago, 1986) 168-85. 60年代から70年代にわたるフェミニズム運動が白人中産階級中心でかつ異性愛中心主義であることを Smith は指摘した。本書の翻訳は『新フェミニズム批評』(青山誠子訳，岩波書店，1990)。アメリカ女性運動の主流がめざした「男並」志向のもつ限界性を伝統的な日本の女性解放論からみたものには江原由美子『女性解放という思想』(剄草書房，1985) がある。特に「女性解放論の現在」を参照。

5) 加藤秀一「ジェンダーの困難——ポストモダニズムと〈ジェンダー〉の概念」『ジェンダーの社会学』189-208を参照。引用文は196。ここで加藤はリンダ・ハッチオン著『ポストモダニズムの政治学』(川口蕎一訳，法政大学出版) のことばを引用して「ポストモダニズムのたくらみとは，『われわれの生活様式の支配的特徴のいくつかを異質化 (非＝自然化) すること』であり」と述べ，男／女の二項対立を崩すこと＝本質主義批判を実践するフェミニズムとポスト・モダニズムの影響関係・接点を整理している。

6) Dee Brown, *Bury My Heart at Wounded Knee: An Indian History of the America* (Holt, Rinehart & Winston, 1970)『わが魂を聖地に埋めよ』上下 (鈴木主税訳，草思社，1972)

7) Forrest Carter, *The Education of Little Tree* (New York: Dell Pub., 1976. rpt. New Mexico UP. 1986)『リトル・トリー』(和田穹男訳，めるくまーる，1991) Jack M.Weatherford, *Indian Givers* (New York: Ballantine Books, 1988) 『アメリカ先住民の貢献』(小池佑二訳，パピルス，1996)

8)『母なる大地父なる空』下巻の河島弘美氏によるあとがきを参照。ちなみに，アリュート人は，北海道オホーツク沿岸に残る遺跡を残した古代人の祖先とも考えられている。となると日本人にもアリュート人の血が流れているのかもしれない。司馬遼太郎『オホーツク街道』(街道をゆく 38，朝日新聞社，1993) 参照。

9) 辻内鏡人「多文化主義の思想史的文脈」『思想』1994年9月号 (岩波書店) 43-66参照。

10) 江原由美子『女性解放という思想』21-23参照。

11) 江原由美子，42-52参照。

12) たとえばおとぎ話において義母と娘の対立関係がしばしば題材にされる (『シ

ンデレラ』『白雪姫』など)。継母はやたら継娘を苛める。この現象について，Maria Tatar, *The Hard Facts of the Grimms' Fairy Tales* (Princeton UP, 1987)『グリム童話：その隠されたメッセージ』(鈴木晶その他訳，新曜社，1990)は，家父長制の抑圧であると指摘している。シンデレラを例に取ると，この物語の原型の話は父に近親相姦を迫られる娘の話であった。家父長制においては，その父の娘への欲望は，物語のレヴェルでは抑圧され，娘の父への裏切りとして表現されることがある。この例がシェークスピア作の『リア王』である（アラン・ダンタス編『シンデレラ：9世紀の中国から現代のディズニーまで』池上嘉彦その他訳，紀ノ国屋書店，1991/234-60参照)。また，家父長である父の承認を獲得するため母と競い合う，もしくは父によって母と競い合わされる娘の母への憎しみ，すなはちエディプス的葛藤を抑圧するために，でっちあげられるのが継母という例もある。つまり継娘苛めの話は，「継母を悪者としてまつり上げることで，家庭内の目もあてられない状況を生みだした責任を実の父母にかぶせなくてもよいという利点も生まれてくる」(『グリム童話：その隠されたメッセージ』218-42参照)。家族成員間の近親相姦や嫉妬や家長の承認獲得競争にまつわる葛藤を直視するかわりに，継母退治においてその葛藤を象徴的に解決するわけである。物語における家族間葛藤抑圧は，父を不在にした継母と継娘対立として表現される例の方が圧倒的に多いことは，まさしく家父長制の支配の根深さをものがたる。好色な父が物語に登場することは少ない。妻と娘の対立緩和に乗り出す父が登場することも少ない。まさに彼女たちの対立が家父長制において必要で便利（分断して支配せよ）であることの証左であろう。家父長の父の承認に家族間における力関係は依存するので，母と娘（もしくは姑と嫁）は対立・競合するはめになる。家族間ばかりでなく女性間競争の構造が家父長制によるものであることは多い。また家父長制をあまりに内面化しているために，その構造が見えず，女性たちが互いを嫌いあい，同性への評価を低くするとゆう現象はいまだに続いている。

12) Sue Harrison, *Brother Wind,* 69.

Feminism / Multiculturalism / Postmodernism A Strategy of Sue Harrison's Trilogy, *Mother Earth Father Sky, My Sister the Moon,* and *Brother Wind*

Kayoko FUJIMORI

There is fairly general agreement that Sue Harrison's trilogy published from 1990 to 1994 is one of the literary fruits that multiculturalism has fostered. Harrison vividly and impressively represents the life and culture of the ancient Alute people, ancesters of Native Americans, based on her research and field work over many years, supported and stimulated by her own rich imagination. But it is not my present purpose to explore this area. My concern is in a feminist approach to this trilogy.

Today's writers who try to create feminism-conscious stories confront much more sensitive and challenging problems than before. Liberal feminism originated from Europe in the 18th century. In the United States, in response to the civil rights movement in the 1960's, it developed into women's liberation movement in the 70's. However, with the permeation of multiculturalism in the 80's, propelled by the current of postmodernism, black feminists(womanists), lesbians and other minority groups' feminists have been criticizing the Caucasian/West/Judeo-Christian/middle-class/heterosexual-centerdness of liberal feminism. Nowadays feminists are expanding their argument into

investigating the origins and structures of various discrimination systems, with and beyond the inquiry about how to reduce or end sexual discrimination.

Some feminists fear that the present feminism agenda may neglect the problems peculiar to women and may result in delaying the dissolution of social unfaireness about women. Yet most feminists realize that it is one of their tactics, as well as one of their imperatives, to emphasize and promote their relationships and cooperative efforts with other discriminated groups. Thus contemporary writers must incorporate the above-mentioned feminist problems into their works if they want to satisfy feminist readers. We can safely state that Sue Harrison has achieved this challenge in writing *Mother Earth Father Sky, My Sister the Moon*, and *Brother Wind*.

This trilogy is classified as a traditional and popular happy-ending fiction for women, in which a young heroine finally attains happiness through a series of torturous experiments and disasters; in the end she gets her own special protector, in most cases, her husband. Harrison's books also end with the heroine's delightful marriage or long-waited reunion with their family. In addition to this, we should note that the setting is in the prehistoric era, from B.C. 7056 to 7023. This means that Harrison's fictions have the advantage of being completely invulnerable from feminist critics' attacks. Criticizing the sexual dichotomy in the prehistorical setting is useless. Because writers must represent the factual aspects of their subjects in their realistic novels, even if some descriptions are offensive to feminists. Above all it is unfair to reproach the defects of past ages from a contemporary view point.

But we are mislead if we regard this trilogy as a mere prehistory

Harlequin Romance. Interestingly Harrison's books can satisfy not only non-feminist readers but also feminist ones. A close reading of these three books leads us to find many devices and episodes to demistify and invalidate patriarchism. In authentically traditional fictions, heroines cannot be really happy without being bound to some patriarchal family ststem. Harrison's heroines, even though they finally return to their male-dominated families and communities, are clearly characterized by a self-independence, self-respect and aggressiveness that we rarely see in women in the fictions with today's setting. Under the disguise of an obviously gender-biased traditional story, Harrison has inserted some unforgettable gender-free characters, female and also male, into her fictions.

Harrison succeeds in fictionizing her materials from the standpoints of multiculturalism and feminism which the literary critics in the present postmodern era are ready to find in new novels. At the same time, Harrison fulfills the contradictory desire of conservative readers, who are in the majority, to consume their familiar plots in unfamiliar sceneries.